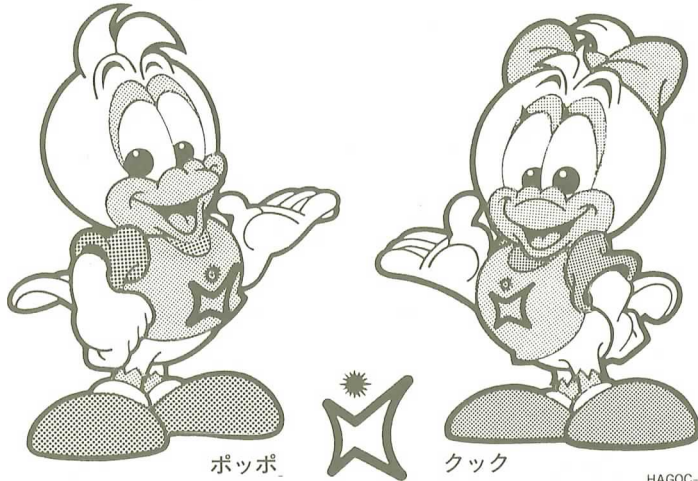


図書だより

〈第30号〉

平成6年2月10日
呉工業高等専門学校
図書委員会



第12回アジア競技大会広島1994

(平成6年10月2日～16日)

広島アジア大会マスコットキャラクター

目 次

[表紙]	1
[読書感想文]		
文学	「伊豆の踊り子」(川端康成著)	C 2 藤原 理恵..... 2
	「塩狩峠」(三浦綾子著)	A 2 平岡 信勝..... 2
歴史	「ひめゆりの沖繩戦」(伊波園子著)	C 1 下岡 哲也..... 3
	「津田梅子」(大庭みな子著)	A 1 水馬 泰子..... 4
政経	「海を渡る自衛隊－PKO 立法と政治権力－」(佐々木芳隆著)	M 3 幟立 晃..... 5
	「『ちびくろサンボ』絶版を考える」(径書房編集部編)	E 3 坂本 真司..... 5
[随想・読書雑感]		
	「死の夏」(ジョン G. フラー著, 野間宏監訳)	M 4 池田 浩史..... 6
	「これからの自動車」	M 5 山下 裕司..... 7
	「スカーレット」(A. リプリー著, 森瑤子訳)	E 4 樫本 東枝..... 7
	「ザ・麻薬」(家田荘子著)	E 5 川手 淳..... 8
	「音楽の海岸」(村上龍著)	C 5 温品 信行..... 9
	「闘牛」(井上靖著)	C 5 土岡 秀和..... 9
	「建築にどのように緑を取り込むか」	A 5 井口 康雄..... 10
	「環境を考えるにあたって」	A 5 迫 真由美..... 11
[新任教職員随想]		
	「平城京を思うに」	庶務課長 田部 信重..... 12
	「想いのままに」	人事主任 小山 政俊..... 13
	「壁という名の試練」	学生課 小林 隆暁..... 15
[海外だより]		
	「レディング大学の本部図書館」	一般科目 川尻 武信..... 16
[私の推薦する本]		
	「志ん生文庫」(立風書房)	一般科目 有廣 圭司..... 17
	「おはなし科学・技術シリーズ」(日本規格協会)	機械工学科 中迫 正一..... 18
	「街道をゆく」(司馬遼太郎著)	電気工学科 脇本 隆之..... 18
[新着図書30選]	19
[お知らせ]	図書館からのお知らせ	23
[編集後記]	24

読書感想文

文学

「伊豆の踊り子」

(川端 康成著)

C 2 藤原 理恵

私がこの話で感動したのは最後の踊り子と「私」が別れる場面でした。旅先で出会った踊り子や他の人間と共に旅をしていく。その中で主人公は成長していく。とくに、息子も嫁も死んで孫が三人残ってしまった婆さんを水戸まで送ることを快く引き受けるという場面があります。ここでは、主人公が他人への思いやりをいなくまで成長したことが分かります。

旅の間、踊り子や、芸人達と素顔で接することによって、何もかも開けっぱなしで他人と接することができるようになった。婆さんとも知り会いでもないのに世話を引き受けた。

主人公にとってこの伊豆の旅は昔の自分から卒業するというとても有意義なものとなりました。

「船の欄干にもたれて沖の大島を一心に眺めていた…」というところは旅の別れをしっかりとえがいています。

船の中で涙がぼろぼろと流れる所は素直になった証拠です。きっと昔の主人公であれば人前で涙を流すことなどゆるせなかったでしょう。そしてこの涙にはたくさんの意味がこめられています。とても澄んだ気持ちになっていたのです。涙を流したのに。

そして横に寝ていた河津の工場主の息子に「何かご不幸でもおありになったのですか。」という質問に

「いいえ、今、人に別れてきたんです。」と答えます。これもまた、少年と知りあいになったばかりなのに目の前で涙を流します。

すべてが親しく、素直に受け入れられるようになっていたのです。それは湯ヶ野をはなれて山越えの近道で踊り子と会話をしてからです。それからというもの、すべてを受け入れることができるようになっていたのです。踊り子との別れも、婆さんの世話も、次から次

へと流れる涙も、少年の親切も。すべてが一つもつかえることもなく、今流れている涙のように。

主人公だけでなく読者までもが澄んだ気持ちになります。こちらまで、主人公の成長を素直に受け入れてしまいます。主人公の成長をまるで自分の事かのように満足してしまいます。

そして、この話を何度読んでも、初めて読むような新鮮さがあります。何度も読みたくなるほど好きになりました。

「塩狩峠」

(三浦 綾子著)

A 2 平岡 信勝

この「塩狩峠」というものは、かつて一度だけ映画で見たことがあった。その時の僕はかなり小さかったので、その内容は覚えていないのだが、ただ結末が悲しかった、そして見ている人に感動を与えたということだけは覚えている。そういうわけで、「塩狩峠」というものを手に取ってみた。

主人公である信夫の生涯を通して物語は語られる。ヤソ（キリストを受け入れて信仰によって生きていく人々）が嫌がられる時代にあって、信夫自身もやはりヤソが嫌いだった。

しかし、家族の者は信夫以外みんな信者になっており、信夫の恋する人も信者になっていった。そのようにして、周りの者はヤソになっていったのだった。

ある日、ヤソの小説家と出会って、その小説を信夫は読んだ。それは牧師である者が、妻を裏切って終わる、というものであった。信夫は絶望した。なぜなら嫌いではあってもキリスト信者、特に牧師というものは立派であると思っていたからである。読者である僕もその結末には驚いた。しかし信夫はその本の中にある聖書の一句に心を留めた。「義人なし、一人だになし。」信夫自身、立派な人であったから素直にこのことばを受け入れることはできない、そんなこともあって、彼は聖書そのものに敵対は示さなかった。

彼の人生は、罪について、命、生、死について考え

るものだった。同時に、読者も罪について、命、生、死について考えさせられた。このストーリーは、キリストを信じた信夫が長年の間愛し続けたある一人の女性ととうとう結婚するというその日、列車のブレーキ事故が起って乗客の生命があぶないというときに、乗っていた信夫が自ら列車の下敷きになって、その列車を止めた、ということが終わった。読者である僕にはここで死なないでほしい、幸せになってほしいと思えた。しかしこの話の目的はそこにあるのではないとを感じる。キリスト信者である彼は、真実の愛を知っていたのだと思う。「人がその友の為に自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない。」まさに、この信夫の犠牲的行為が、キリストの贖いの尊さを表している。実に信夫もキリストによって自分の罪の結末である死から贖われた者の一人であった。

信夫がなぜ死ななければならないのか、よりによってあんな良い人が。これからも人の為に役に立つではないか。世はそのように思う。しかし、彼の死は神の前に多くの実を結んだのではないか。『一粒の麦、地に落ちて死なずば唯一つにて在らん、もし死なば多くの実を結ぶべし。』助かった乗客はもちろんのこと、読者である僕達一人一人にすばらしい感動を与える、彼の言葉のみならず、彼の信仰による歩みそのものが、真実の人生をあかししていると思う。

歴史

「ひめゆりの沖縄戦」

(伊波 園子著)

C1 下岡 哲也

沖縄戦は軍人を上回る数の住民の人が犠牲になりましたが敵の砲撃にあって死んだ人もいますがその他では日本軍によってスパイ嫌疑で殺されたり壕から日本兵によって追い出されたりして死んだ人など日本兵によって殺された人が多くいました。

またひめゆりの人々が野戦病院でも戦場を南に移すとき、移動できない重傷の兵士たちが軍隊の機密をもらすことを恐れたために日本兵によって青酸カリ入りのミルクが与えられ、死にきれない人は衛生兵が銃剣で殺していました。「生きて虜囚の辱めを受けること

なかれ」そんな教育によって人の命を軽んじていたそのころの日本軍の考え方がよくわかります。また日本兵によって殺された人は名誉の戦死などといわれていたのだと思いますが事実とは全く異なり平然とうそがつけるところに腹立たしきを感じました。

沖縄県民は本土防衛のために楯になってくれた、祖国を守るために命を投げ出してくれたということを知ったことがあります。その殺された日本兵は喜んで死んでいったのではなく、「集団自決」も国に殉じて喜んで死んでいったのではなく、だれもが生きたい生きたいと思いながら死んでいったのです。当時の教育が生きるということを許さなかったといってもいいと思います。「教育」それは一歩間違えばとても大変なことになってしまう恐ろしいものだというのを僕は感じました。

戦場は人間が人間でなくなる場所。とてもおそろしいところですよ。こんなものは二度とあってはいけないと思います。

沖縄の人々は戦争で多くの尊い命を失いましたが実にそれはただ本土決戦の捨て石のようなものだったということでした。たったそれだけのことで何十万という人々が無残に死んでいってもいいものなのでしょうか。この事実を知ったとき沖縄の人々はとてもとても怒りを感じたと思います。だから日の丸掲揚や国歌である「君が代」を歌うのが日本全国で最も少ない県になっているのだと思います。

これらのことから「軍隊は住民を守らない」という事実がわかります。現在の自衛隊も軍の作戦計画が最優先で住民対策はその遂行のために組みこまれているにすぎないということです。国民がいてからこそ国が豊かになるのに、国を守るために国民を殺してはなんにもならないと思います。

今PKOでカンボジアに自衛隊が派遣されましたが最初は機関銃などを装備しないといていたのにポルポト派に攻撃を受け今では装備しなければ殺されてしまいます。

しかし日本は平和憲法によって軍隊をもってはいけないことになっていますが自衛隊というものをもっていてそれは名こそ国を守るものですが立派に人を殺せる兵器をもっています。それだけでも違法なのに国会ではカンボジアへの派遣も決まり行われました。

治などが行えるのでしょうか。その憲法はアメリカが草案したのですがとてもいいものです。明治につくられた天皇を中心とする大日本帝国憲法から戦争によって生まれその教訓を生かしたものが現在の憲法です。その基本というものは戦争で日本が大失敗したものです。それを繰り返さないためには今の憲法の基本的なものを大切にしなければいけないと思います。だからもし国際貢献がしたいならば国連に自衛隊をあずけて国連の部隊として世界で活躍すればいいと思います。

今の日本は未だに外国を侵略したことをあやまろうとせず多くの人々を殺したことに對して罪を報いようとしていません。そんなことではまたいつあのような悲惨なことが起こるか心配です。過去を振り返り昔の罪を償い、教育によって同じ失敗を二度と繰り返さないようにしてほしいです。

「津田梅子」

(大庭 みな子著)

A 1 水馬 泰子

津田梅子は日本で最初で最少年の女子留学生です。1871年、当時わずか7歳でアメリカへ留学しました。そして11年間アメリカで過ごし間もなく満18歳になろうとする時に日本に帰国しました。アメリカでの11年間をチャールズ・ランマン氏の家に寄宿し、ランマン夫人に娘同様に愛されます。日本に帰ってからも日記同様に手紙を送り続け、彼女が夫人に大変愛されていたことがわかります。帰国してから華族女学校の女高師教授を任せられ、明治33年自ら女子英学塾（現在の津田塾大学）を開きます。

この本を読むまで私は津田梅子について日本で最初的女子留学生だったという事と、津田塾大学を開いたという事ぐらいしか知りませんでした。だから津田梅子の生き方について立派な人ぐらいにしか思ってなかったし、津田梅子の考えていた事や思った事は全然知りませんでした。だけどこの本を読んで津田梅子は明治時代に生きている女性とは信じられないようなすばらしい意見をもっていて又自分の考えを行動に移した、すごい人だと思いました。

私が津田梅子の考え方で一番感心したのは当時の日本と外国の関係の事実をしっかりと見た考え方や、男尊女卑に関する考え方です。

この本を読んで津田梅子の一生の他に、当時の女性が私が思っていたのよりずっと地位が低かった事をしました。当時は妻より夫が上位にあり、女の子が生まれるより男の子が生まれる方が望まれました。女性は教育を受けずに育つことがほとんどでした。男性ばかりでなく女性たちさえ自分たち女は男より劣っていると思込んでいました。津田梅子は男性の力が大変大きかった時に女性の地位を広げてくれました。そして女性は男性の所有物という固定観念を打ち破ってくれました。また、そのことで男性を非難するのではなく男性的な力を認め、教養を高めた男女がまじりあって意見を交かんすべきだと考えています。

津田梅子がこのように男女差別について考えられたのは、当時の日本人とは別の躰きょうで育ったからだと思います。当時の日本女性は男性より低い立場に満足していてその事を深く考えませんでした。もし津田梅子が自由なアメリカで育たず、男尊女卑の根がとても強い躰きょうで育っていたら、男女が何かについて平等に意見を交わす事なんて考えられない人になっていたと思います。

当時日本は英国宮廷の真似をし洋装をとり入れたため、外国人は日本人を見下し笑い者にしました。津田梅子は滑稽なかつこうをしている日本人について、ばかにするのではなく、又外国文化ばかりを尊重するのでもなくただ日本の文化の着物などを大切にしています。そういう所を本当にすばらしい人だと思います。

津田梅子には、当時やっと目ざめ始めた日本の女性を魅きつけるものがあつたと思います。男女差別の強い時代に当時の女性では考えられないようなすごい人生を送つた人だと思いました。



政経

「海を渡る自衛隊－PKO立法と政治権力－」

(佐々木 芳隆著)

M3 幟立 晃

アジア大陸の極東に弧状につらなる日本列島は周りのアジア諸国に強烈なエネルギー線を放射しているといえる。昔日本は経済的な行き詰まりと領土拡大という野心から、無謀な戦争をし、アジア諸国の反感をもろにくらった。戦後50年たってもアジア諸国は特に日本に対して不信を抱いているにちがいない。

実際、日本の政治は国民合意への努力を軽視したゴリ押し、野心家たちの利権漁り、官僚的な組織の縄張り争いや増殖作用といったものに影響されることが多かった。

日本は自衛隊に巨額の軍事費を投じている。世界でも指折りの軍事費を食う高性能装備の軍事組織と呼ばれている自衛隊は、PKOに参加することになった。これについて僕は国際協力も大切だけれども、昔日本がアジア諸国にした仕打ちを考えると、ますます日本不信におちいってしまうのではないかと考えてしまう。だから、僕は行くべきでなかったと思った。事実、そんなには役に立てなかった。

それにしても日本の政治はなさけない。戦後、非軍事外交を貫き、平和国家の道を歩んできた。しかし、半世紀もたつと政治家はますますだめになったと思う。例えば、一番ひどいのが金に対する腐敗だと思う。今の政治家は献金をしてもらわないと成り立たないとも考えられる。

「経済の地球儀」上では国境の垣根が低くなって、国と国との相互依存は日増しに強まってきているといえる。だから、政治の面でも、境界のない世界の実現を究極の到達点としてほんの少しだが歩きだしたといえる。時間をかければ「政治の地球儀」上でもいづれ、国家主権の一部を国際機構に委ねる時代が来るかも知れない。だから、地球社会にとけ込み平和国家の日本だからこそ担える地球的な役割をさがし出して着実に実行することは、日本のとるべき戦略になったと言える。欠かせないのは、「何のため、誰のために」といつ

た目的をさがし当てることである。しかし、それは操作され既成事実化された現実に基づくものであってはならず、日本にふさわしい汗の流し方を発見する道であると同時にPKO等協力のなし崩し運用の余地を排する最善の方法でなければならない。

「『ちびくろサンボ』絶版を考える」

(径書房編集部編)

E3 坂本 真司

僕も幼いころ、何度か『ちびくろサンボ』を読んだことがあります。「虎が溶けてバターになった」という意外なストーリーが大好きで、大変楽しく読んでいた記憶があります。しかし、この『ちびくろサンボ』が、黒人差別にあたるという理由から、すべて絶版されたということをこの本を読んでしりました。

差別だと言われれば、「なるほど」と思えなくもありませんが、でも僕自身は今まで一度もそんなふうを意識して読んだことがなかったので、なぜ『サンボ』が絶版されたのか不思議に思っていました。

しかし、黒人差別の歴史的経緯や差別問題に対するいろいろな人達の意見を読んでいくうちに『サンボ』の絶版は当然だと思われるようになりました。むしろ、日本の場合においては、十分な説明や論議のないまま絶版になったということの方が問題であるように思いました。即絶版すれば差別がなくなるというわけではなく、根本原因を取り去る努力をしないで、ただ単に絶版にさせるだけでは、表面的にかき消しているだけで、何も解決しないと思います。どこが、なぜ「差別」につながるのか、また人権尊重とはどういうことなのか、もっとお互いの認識を深め合うべきだと思いました。

しかし、多くの人達は、頭では分かっている、面倒なことに巻き込まれたくないがためにこういう問題から逃避してしまいがちであるような気がします。

「臭いものにはフタ」や「触らぬ神にたたりなし」というような考えこそ、差別意識を強めている原因の一つだといえると思います。また、日本人は人種差別問題を「他国での出来事」としてとらえがちで、関心が薄かったように思えます。けれども、日本はこれまで決して「単一民族国家」などではなかったし、これからはますます「多民族社会」化・「多文化社会」化していくと思います。そのためにも、これからの日本に

とって、こういう考えをなくし、もっと人種差別問題に関心を持ち、取り組んでいくことは、今まで以上に重要なことになると思います。

随想・読書雑感

「死の夏」

(ジョン G. フラー著)

M 4. 池田 浩史

この本は、1976年にイタリアのセベソで起こった化学工場の事故によっておこされた出来事について書かれたものです。

この化学工場はTPC（トリクロロフェノール）をスイスにある親会社向けにつくっていた。ところがこの化学反応器が爆発し、異様な雲が発生した。その雲の通りすぎた所にいた人は、目や肌がひりひりしたので工場に対して抗議した。しかし、その当時イタリアの化学はそれほどすんでおらず、スイスに分析を依頼した。スイスでは、それが何か分かっていたが、その物質があまりに有毒なため、なかなかイタリアの方に情報をわたさなかった。このためなにも知らない住民が多く被害を受けた。

この有害物質は、ダイオキシンと呼ばれ、TPCが200°Cを超すと発生する。またこの物質が、人体に及ぼす影響は、肝臓と腎臓が冒され、人体の免疫性が低下する他に、催奇形性や突然変異性（ガンの原因となるような染色体の変化を誘発する性質）がある。

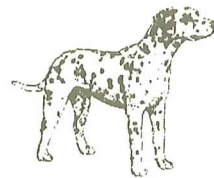
ダイオキシンは、非常に安定な物質で、自然界では分解されない。それゆえ、どんなに洗い流しても、無駄で、汚染された地域はずっと閉鎖するしかなかった。

汚染地域に住んでいた人たちは、皮膚がただれたり、内臓障害、骨髄障害、リンパ球の減少などがおこった。また、小動物（犬、猫、鳥など）は、内臓障害をおこし、ほとんどが死んだ。そして、閉鎖地域に指定された家をおわれた住民たちは、自分の家に帰りがり、避難所を抜けだし、こっそりと閉鎖地域にもぐりこんだり、高速道路上でデモを行ったりしたがどうすることもできなかった。

この本を読んで、この悲劇の原因の1つは、スイスとイタリアの環境汚染に対する認識の違いがあると思う。スイスは、汚染の基準が厳しいが、イタリアは緩やかだった。このため、イタリアでTPCを生産していたからです。現在の日本では、環境問題についてかなり感心がありますが、その当時の日本でセベソと同じようなことが起こる可能性はかなり大きかったのではないかと思います。

2つ目の原因としては、有害物質が何であるか判明したあとも、スイスがイタリアに伝えなかったことです。このときスイスは、損害賠償のために汚染地域を割りだしていたというので今の日本の会社がこのような事故を起こした時にしそうなことだとへんに感心しました。それはさておき、もし、スイスがこのときすぐにイタリアに伝えていれば、汚染地域の拡がりをおさえたり、住民の逃避ももっと早くできたのではないかと思います。

その他の原因として、イタリアの化学が進んでいなかった（有害物質の分析ができなかった）ことがあります。しかし、これは今後、世界中のどこでも第2のセベソが発生する危険性をもっています。なぜなら、事故の時、全く未知の有毒物質が発生する可能性があるからです。もし、身近でそんな事故が起こった時、我々はいったいどうするのでしょうか？



「これからの自動車」

M5 山下 裕司

最近、窒素酸化物、二酸化炭素などの自動車の排気ガスが問題となっている。また、化石燃料は有限である。現在、これらの諸問題を解決する自動車として、電気自動車、水素自動車、メタノール自動車、天然ガス自動車などが考えられている。これから、ガソリン、ディーゼル自動車に代わるものは何であろうか。

排気ガスが一番綺麗であるのは電気自動車である。騒音や振動も小さく、保守・点検も簡単といった特長を持っている。しかし加速性能は悪く、しかも七、八時間の充電で走れる距離は一般道で百キロ以下といったものである。したがって電気自動車は自動車の台数が多い都市部での使用に向いていると思う。都市部では排気ガスも騒音も少ない方がよいし、走向距離が短いのも問題ないだろう。電気自動車は低公害ではあるが、電気を発電するときに石油を使用すれば全く意味がなくなってしまう。

電気自動車よりも将来性のあるのが水素自動車である。水素自動車の燃料の水素が水の電気分解などで造ることができるので、燃料は無尽蔵にあるとよい。水素は気体の状態では爆発しやすいので、チタン系合金などに吸収させる。この種の合金は冷却すると水素を吸収し、温めると放出という特徴がある。車が走行するときにはエンジンの冷却水でタンクを温め、水素を取り出す。水素自動車は、ガソリン自動車の燃料タンクと燃料噴射装置を改良するだけで使用できる。走行性能はガソリン自動車に劣らず、窒素酸化物の排出量は十分の一程度である。しかし最大の欠点は合金の吸収量が少なく、水素の転送・貯蔵のシステムがないことである。また、騒音や振動も大きい。これらの問題はすぐには解決できないだろうが、水素を安く製造できるようになるとすれば、水素自動車が一番有望だろう。

普及に時間がかかるとすればメタノール自動車や天然ガス自動車だろう。メタノール自動車はディーゼル自動車の燃料タンクやポンプを亜鉛メッキし、燃料の燃やし方を工夫すればそのまま利用することができる。一回の燃料補給で走行できる距離は電気、水素自動車よりも長く、加速性能や馬力なども劣らない。しかも窒素酸化物の排出量はガソリン自動車の半分以

下になり、黒煙もでない。しかし有害なアルデヒドが排出されるという問題がある。天然ガス自動車は、燃料を蓄えるボンベが重くかさばってしまう。したがって乗用車では二本積むのが限度であり、一回の充填で走行できるのは一般道で二百キロ以下である。二酸化炭素の排出量はガソリン自動車の七、八割で、窒素酸化物もディーゼル自動車の半分である。

このようにいろいろな自動車が考案されているが、どの自動車も実験的に走っている状態である。それぞれ一長一短があり、一台に複数の動力源を積んだ自動車がよいのではないだろうか。どんな車にしても、資源や環境問題を考えたものであって欲しい。

「スカーレット」

(A. リプリー著)

E4 榎本 東枝

この「スカーレット」という本は、あの「風と共に去りぬ」の続編です。私は「風と共に去りぬ」は、ビビアン・リー主演の映画の前編は見たので内容はなんとなく知っていましたが、後編を全部見てないので、どういう終り方をしたのかは、あまり知りませんでした。だから、そんな状態でこの「スカーレット」を読むのは無謀かな、と思いながら挑戦してみました。

読んでみてまず思ったのは、主人公のスカーレットは、なんて人に誤解されやすい人なんだろう、ということ。メラニーの葬式の時、妻メラニーに先立たれたアシュレが悲しみのため自分を見失って、柩に覆いかぶさって墓穴にくずれ落ちそうになった時、スカーレットは必死になってアシュレを引き止め、抱き寄せて柩から引き離し、普段の自分を取り戻しなさいと、厳しくたしなめました。それは、まわりの人が、たとえアシュレが墓穴に落ちて首の骨を折ったとしても、止めもせず、そんなにもメラニーの事を愛していたのか、メラニーもこんなに愛されて幸せ者だ。と言うのを知っていたし、メラニーもそれを望まないことが分かっていたからです。なのに葬式に参列した人々は、スカーレットがアシュレの事を愛していたのを知っていたので、みんなは口々に、なんて恥しらずな女なんだ、メラニーが死んだのをいいことにアシュレのこを取り戻す気だよ。と陰でささやき、スカーレットが、その式の間中涙を見せずにいるのを見ては、メラニー

が死んでうれしいんだろうよ。あの目をごらんよ、けものように目をひかせてアシュレを狙っているよ。というのです。スカーレットは涙をがまんし、泣き声をあげまいと必死で唇をかんでいたというのに……。

スカーレットはめったに人に弱みを見せません。どんなに弱音を吐きそうになっても、いつも必死にこらえ、困難に立ちむかって乗り切っていくのです。

私はスカーレットのこの「強さ」には、すごく憧れ、尊敬するものがありますが、スカーレットの場合、この「強さ」が逆に誤解される原因となっているようです。

さて、スカーレットとレット・バトラーの関係ですが、スカーレットは、本当に心から愛しているのはレット一人だということに気がきますが、レットの方は、いままでスカーレットに身も心もささげてきた事に疲れて、もう深入りは自分が傷付くだけだからごめんだ、とスカーレットから離れていきました。でもスカーレットはレットはまだ自分を愛しているはずだと、なんとかよりを戻そうとしますが、いまもレットの方が一枚上手なので、スカーレットが今日こそは心から愛していることを伝えるぞ、と思っていても、レットの皮肉に引っかかって、ついムツとして心にもない事を言ってしまうのです。

結局、スカーレットはレットの子供を産んで、それをきっかけによりを戻そうと思っていましたが、子供の事を知らせる前にレットが再婚してしまい、一人で子供を育てる事を決意しました。私はこの二人にうまくいったのかと思いましたが、最後はめでたくHAPPY-ENDだったので良かったです。

この「スカーレット」は学校にもあります。見たかんじ、本は厚いし重いしいかにも読みにくそうですが、けっこうおもしろかったので、みなさんも機会があれば、ぜひ挑戦してみてください。



「ザ・麻薬」

(家田 莊子著)

E 5 川手 淳

この本の著者、家田莊子は最近「イエローキャブ」や「ニューヨークの課外授業」などの本を書いて話題になった人である。これらの本は、全てノンフィクションであり、著者自身の体験やインタビューをもとに書かれたものです。今回のこの本も、ハワイにおける日本人留学生や日本人観光客の麻薬に対する実体が書かれている。

マリワナ（大麻）、コカイン（コーク）、エクスタシー（エクスタシー）、LSD（幻覚剤）など様々の種類の麻薬が存在するが、一言で「麻薬」といっても身近なものであると思う人は少ないと思う。現に一昔前まではドラッグを遠い世界のこと、「別世界の詩的感覚」として捉える人が多かったと思う。しかしドラッグを使用する年齢がどんどん下がっていき、職業、性別、偏差値にかかわらず、好奇心のある人がついやってしまう。そのために麻薬がさらに身近になってしまった。かつては、海外でドラッグをするものと思われていたが、今では最初は「日本で」という傾向が変わってきた。この本でインタビューをした人達のほとんども最初は「日本で」と答えている。アメリカでは、ほとんどの人々が麻薬をしたことがありまた続けている人も多い。しかし日本でもそれに追いつけばかりに麻薬の使用者は急増している。

本に出てくる留学生や観光客は、好奇心のため、お金のため、快楽のため、ファッションの一部として麻薬を使用している。

アメリカでは、酒に対する規制が厳しいために、年齢制限がないドラッグのほうがお酒よりも簡単に手に入る。今では日本でも同じようなことがいれる。誰でも街中に行けばドラッグを簡単に手に入れることができるのが現実となっている。

特にマリワナ（大麻、葉っぱ、ウィード）などは、禁断症状、副作用も少なく、価格も安いためにタバコと同じ感覚で使用されている。そしてさらに使い麻薬LSDなどへと進んでいくことになる。

麻薬使用者の中でもジャンキー（中毒）となってしまう者のほとんどは、自分がジャンキーであることに気付いている者は少ない。

その反面、麻薬を自分でコントロールして麻薬の助けを借りることによって、仕事や生活が順調にしている人もいる。

現在、日本では法によって麻薬は厳しく取り締まられているが、こういったジャンキーに対してケアしてくれる施設が欠けている。

ドラッグは必要であるか否か。ドラッグは法で仕切るべきか否か。ドラッグについてもっと考えるべきでないだろうかと思う。

「音楽の海岸」

(村上 龍著)

C 5 温品 信行

この小説では題名にもある「音楽」のことを直接語った小説ではない。むしろ主人公のケンジは音楽嫌いなのである。ケンジはジゴロをやって暮らしている。自分自身では、学生時代はもてなかつたと言っているが、「今、女を四人飼ってます。」とも言っている男でもある。そういうケンジも生まれた時から音楽が嫌いだった訳ではない。「風や波の音がいつか自然に音楽になったっていう人がいるけど、それはひどいバカだ。オレは音階を発明した人が、音楽を作ったんだと思う。」と音楽の始まりについても話している。しかし、ケンジは音楽が嫌いなのである。昔、シューマンの「クライスレリアーナ」を聴いている時、ある旋律が自分を酔わせていること気がついた。そこでケンジは「それは絶対的な不安定さを一時的な安定に変えるために脳の代謝物質を、作り出しているのだ。」と言い、ケンジはそういうメカニズムを必要とする人類の不自然さがたまらなくなつて音楽が嫌になつたのである。それ故に、ケンジは安定を求めない。ジゴロであるが組織には属していない。彼はある男の復しゅう計画を請け負っている。金で誘われその場でOKした。ターゲットの映像作家に近づき決定的なダメージを与えるため彼と一緒に映像作品を作る話を持ちかける。ケンジは最終的には映像作家を生きる資格を断つような立場まで追い込む。

「オレは女を嫉妬させて喜ぶような、下劣なことは嫌いだ。しかし、いったん嫉妬した女の気嫌をとるのは、時間のムダだ。」と言うあたり、映像作家がどのようになったかは、小説に書かれてなくても想像が

く。こんな残酷な人間であるケンジもかなりの読書家である。トーマス・マンやドストエフスキーを読んで彼らが生きたのは「不良のための小説」と思っている。ジュネやセリーヌも好きである。「セリーヌを読むような不良がいたっていいじゃない。」と考えるのは村上 龍の作品の原点であるようにも思える。

「闘牛」

(井上 靖著)

C 5 土岡 秀和

人は一生のうちで幾度賭けをするのだろうか。ふと、そんなことを考えた。その賭けは例えば進路であったり恋愛であったり、あるいは生死かも知れない。人は何かに賭けることで自分を試すのだと思う。そしてこの本の主人公、津上が賭けたものは「闘牛」であった。

新聞社の敏腕編集長の津上は並々ならぬ才能と大胆さをもって仕事をこなす切れる男であるが、その影に何故か虚ろで孤独な素顔を持っていることに文中何度もはたとさせられた。あたかも恒星が自身は数千度もの高温で燃えているにもかかわらずその光は青く冷えているかのように。そうした彼の二面性に一層私は惹かれ、夢中になっていった。

創立一周年という新聞社のイベントに闘牛大会を行うことは、いわば社運を賭けた選択であった。時代は戦後、その賭けが当たれば会社の大々的な宣伝になることはまず間違いない。しかしそれが外れた時は——。だが彼は賭けたのだ。新聞社の未来を。そしておそらく自分自身を。

闘牛大会開催までに彼の前には何度も大きな壁が立ちだかつた。牛を運ぶ列車が足りず、開催場所が見つからず、そして何より莫大な費用がかかること。頭をかかえるようなことばかり起き、私だったら途中で挫折するだろう難問に、彼は異常なまでの情熱でもって闘牛に固執し無理を押しつけて解決していった。何が彼をそこまで熱くさせるのだろうか。そして何ゆえにこんな危険な賭けをするのだろうか。私ならきっとできないと思う。もちろん、試験の山賭けや野球の勝敗といった小さな賭けは何度もしたことがある。だが社運を賭けてまでの選択はそれらとは訳が違う。そこまでして何が得られるのだろうか……。ここまで考えて気づいた。彼は孤独だからゆえに賭けで心を燃やそうとし

たのではないかと、そしてそんな自分を彼自身止められなかったのではないかと。もしそうだとすると、賭けとは時に悲しいものだった。

そして大会当日。本当に賭けは悲しいものとなった。折からの天気は雨。三日間の興行の内の一日目、二日目と雨が降り込めた。彼は負けたのだ。彼の傷ついた心は私にも痛い程分かった。なぜなら私も賭けていたからだ。彼が成功することに。ようやく晴れた三日目、大会きっての呼びものの二頭の牛の試合は一時間にも及んだ。あまりにも長い退屈な試合に、引き分けにするか最後まで闘わせるか観衆に問いかけた時、多くが続けることを選んだ。全ての人が賭けているのだと思った。観衆も牛の飼い主も、会社も津上もそして私も。

人間は生きていく上で幾度も選択という賭けをする。その賭けが正しいか誤っているかはわからない。ただそうしている時、心は燃えている。あるいは心を燃やすために人は賭けるのかも知れない。どちらにしても“人生は賭け”とはよく言ったもので、きっと私はこれから幾度となく何かに賭けていくだろう。心を燃やして。

「建築にどのように緑を取り込むか」

A 5 井口 康雄

盛りつけとしての緑

どんなにおいしい料理でも、“盛りつけ”つまり見かけが良くなければその味を本当に楽しむことはできない。このことは建築についても当てはまる。ある建築が機能的な平面を持っており、図面の上では魅力的な立面図で描かれていたとしても、そこに“緑”がなければ、その空間はとてつろぐことはできない無味乾燥なものになってしまうかもしれない。しかし空腹を満たすためだけに食事をしている人にとっては、盛りつけなど関係ないし、建築を無機的にしかとらえることのできない人にとっては“緑”の魅力など知る由もない。

そこでわたしは空間に潤いを与え、建築の良さをより一層引き出すための“緑”とそれを取り入れる方法について述べる。

建築と緑

1. 緑について

緑とは良きオープンスペースのことである。ただ単に樹木を量的に増やすのが良いことではない。例えば竜安寺の石庭や、運河の都ヴェニスのように緑がなくても魅力的な空間はたくさんある。しかしその良きオープンスペースは確実に失われている。

2. 緑をこわした人たち

それは土木屋、建築屋、造園屋である。彼らは自らの利益を優先するあまり、既存の緑をこわしてコンクリートや、建物や、新しい緑に変えたのである。

3. さまざまな緑

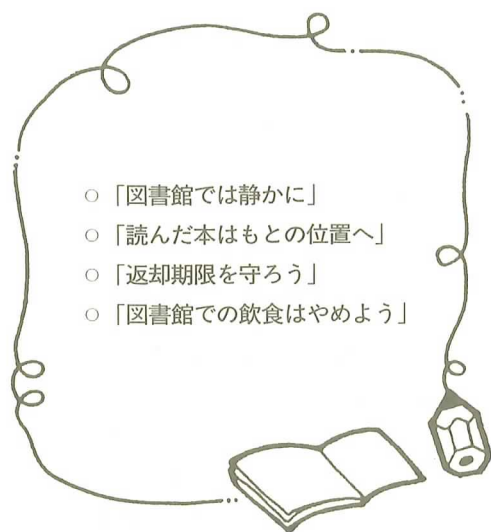
緑を人工と自然の度合いに応じて分けると、原生林の緑、森の緑、里の緑、街の緑、公園の緑、街路樹、住まいの緑、屋内の緑、人造の緑、食べる緑となる。

4. 建築と緑

緑が建築に及ぼす効用としては次のことがあげられる。ファサードに表情を与える、映る影を落とす、遠近感を与える、季節感を与える、歳月を感じさせる。

5. 緑計画の前提

機能と形には一義的な関係はなく、快適な動線は長いほうが良い。ゾーニングは立体的に考えるべきである。ある条件に対応する計画は無限にあり、これをまとめるためには感性が必要である。



- 「図書館では静かに」
- 「読んだ本はもとの位置へ」
- 「返却期限を守ろう」
- 「図書館での飲食はやめよう」

6. 緑の計画と技法

“緑”が最初から計画に組み込まれ、それが予算化されているべき。

7. 緑のデザイン

格子に割るとか、焦点を造るといたさまざまなデザイン技法について。

建築に緑をどのように取り込むか

ここでいう取り込むとは、単に樹木を植えたり観葉植物を置いたりするという事ではなく、建築を周りの風景・自然といかに調和さる、景観や建築をいかに魅力のあるものとするかという広い範囲で考えたい。

参考文献を読んだ上で、自分なりに建築と緑、あるいは自分と緑について考えてみた。建築は緑を取り込むことによってはじめて生きた建築になるのではないだろうか。つまり、緑を取り込むという作業が建築に生命を吹き込むような気がするのである。

そこでどう緑を取り込むかだが、それにはまず建築自身が良くある前に、緑つまり周囲の景観や自然が美しくあるべきだと思う。我々は美しい景観や自然にならされている。そこでまず一人一人が自分の目でここはどうすればもっと改善できるのか、もっと調和のとれた景色になるのか考えることから景観の再構築が始まるのではないかと思う。役所や業者まかせにするのではなく、市民サイドから積極的に提案を試みたり、あるいは要求したりする必要があるのではないだろうか。そのような環境に建築するという作業は一見すると、調和をはかる作業のように思えるが、わたしはあくまで緑を取り込む作業と思いたい。建築自身単に調和していれば良いのではなく、より積極的に緑を引き寄せるような力のある建築であるべきだと思うからである。

参考文献：建築と緑

著者：瀧 光夫

発行所：学芸出版社

発行年：1992年

「環境を考えるにあたって」

A 5 迫 真由美

環境、環境ってこのごろよくいわれる。

しかしこんな時は、アヤシイ、と思う。つまり、こんなときはきっと、いや当然、環境が、最高に悪くなっている、環境が破壊されている時だと思う……。

都市に限らず、われわれの日常生活空間で緑や自然資源の問題が生動的な観点から取り込まれるのは、いまに始まったことではない。しかし、「エコ・シティ」や「エコロジカルなまちづくり」として具体的かつ計画的に行政と住民が取り組むようになったのは、それほど昔ではない。

環境問題が今日的で身近になったのは石油危機以降であろう。事実、ドイツではその後、連邦自然保護法が生まれそれに連動して他の連邦法や各州の自然保護法の改正が続き、各種の事業、計画の中での自然環境・自然資源の位置付けが大きく、かつ高くなった。今まで考えられなかった種の多様性・希少性を考慮した事業、省資源・省エネにも関連する「緑」空間整備を行う事などがクローズアップされてきた。人々の関心も、日常の緑であり生き物と共存する自然である。街づくりや身近な空間のレベルアップに緑や自然の質・量・形態が問題となっている。

エコ・シティの基本は、いかに身近な自然＝生き物の棲息空間を都市のなかでつくり上げるか、という点にある。どの都市でも、そのための用地確保はそれほど容易でない。また単純に緑だけ増やせばよい、というものでもない。住民・企業にできる方法とその部分、それらが集まってエコロジカルなまちづくりが可能になる。住民レベルでは、身近に緑を増やし生き物を呼び戻すために、屋上や建物の壁面、建物に囲まれた中庭などを見直し、自らの手と行政の援助で都市に「緑のオアシス」をつくりあげてきている。また、都市レベルでは近代化の過程で劣悪になった居住環境を、新たな視点から再開発・再整備する総合的な計画のなかで緑を多く増大させ、自然の質を高めるものである。道路・鉄道・空港・河川・住宅・ゴミ処理場などの計画で公園緑地整備も合体することにより、大きな緑地＝緑のオアシスが生まれている。前者は、規模は小さいけれども都市全体に可能であり、後者は重点的にまとまった大きさの緑の塊をつくっていく。エコ・シティ

の全体と部分はそれぞれ関連しあい、小さい部分に棲息するものと、大きい部分でしか棲息しないものがある。したがっていずれか一方のみでエコ・シティは完成しないであろう。

次に地域環境の問題とも併せて非常にクローズアップされてきているバイオフィットということばについて、以前新聞で読んだことがある。そのことについて少しレポートする。その中には生物科学だけでなく建築とかインテリア、あらゆるものが、人間にとってどういう役割をしているかを再チェックしていくとか、エコロジーだけではなく経済にもあてはめて一緒に展開していこうといった新しい試みにスポットがあたってきたと思う。

エコロジーというのは、確かに自然と人のひとつのシステム、エコシステムをつくっている。しかし、それは人間の立場からみたシステムであって例えば、樹木や昆虫の立場からのエコロジーではない。人間が生物界のトップにいたいと思っていれば大間違いであるように思える。だから「エコロジー、エコロジー」とかいうけれども、その自然とは何であろうかということをもっと思想的に深める必要があるのではないかと感じられる。造園設計をするのに植物図鑑を見て、そのイメージをふくらませて、レイアウトするだけでは、実際には、木はどういうサイクルで、土、水、自然・風土に関わりあうのか、自分がその植物とどの程度コミュニケーションしているのかということが分かっていないのならば、環境設計は、難しいのではなからうか。何よりも、先にしなければならぬことは、何坪かの土地を借りるなり、買うなりして植物としばらくの間、付き合ってることだと思う。そこで得た、知識の世界だけでは、感じられないものを造園設計や環境設計に、生かしていくべきだと考える。

参考文献 (人・都市・自然のコミュニケーション)

マガジン季刊ジャパン・ランドスケープ)

安藤忠雄 vs 佐々木葉二 の対談にて P.8~13

新任教職員随想

平城京を思うに



庶務課長

田部 信重

大和路を旅行された方は御存じかと思うが、奈良駅から近鉄電車に乗り、大宮駅を過ぎると車窓に広大な草地在る。そこは今から約1300年前に築かれた宮殿や役所のあった「平城宮」の跡である。広さは130ヘクタールあり、昭和28年から奈良国立文化財研究所が国有地化を図り、発掘調査し、整備管理しているが、40年を経て未だ半分も調査を完了していない。発掘調査とはそれほどの慎重さが求められるのか？ 否である。それは平城宮跡だけでなく、平城京跡との関連も重要な研究テーマであり、京域の開発に伴う発掘調査を併せ行っているため、それでは一体奈良の都「平城京」はどれほどの規模かと言えば、平城宮を北のほぼ中央に据え、西端はあの大茶盛りで有名な西大寺、東は東大寺、南は大和郡山城で囲んだ基盤を想像して頂けようか。

私は、かつてその研究所に庶務係長として3年間在籍し、調査結果の新聞発表や現地説明会に同席したことがあり、様々な思い出とともに色々と学ばせて頂いたことに感謝している。

平城京には、呉市の人口の約半分の10万人(一説には20万人)が住んでいたとされる。が、奈良盆地の北部には大きな川もなく、水道、下水の完備されていない当時、人々の生活や如何ばかりかと察しられ、まゆつばものかとも思われるが、宅地跡の調査結果などから推測したもので、幾つもの共同利用の井戸を穿ち、また、つい30年前頃まで見られた屎尿を田畑の肥料にしていた光景を思い浮かべるとき、何故か納得させられるのが不思議である。

宅地といえば、官位の高い貴族は宮殿に近い場所に

大きな邸宅を賜り、下級役人や庶民は宮殿から離れた場所に小さな家を構えていたとのこと。このことは弓削の道鏡と称徳天皇（女帝）の寵愛を競った藤原田村麻呂の「田村第」跡や「奈良そごう」建設地の発掘調査で数万点の木簡が発見され、大きく報道された「長屋王」屋敷跡などが宮域に隣接し、しかも庭園遺構があったことからして頷けよう。当時の役人の勤務時間は日の出から昼過ぎ迄であるが、下級役人の場合、日の出までに役所に到着するために、郡山辺りの家を暗いうちから出ていく情景を思うとき、ドーナツ化現象から郊外に居を求める現代サラリーマンの労苦と相まって、彼らを身近に感じられる。

今、平城宮跡内を歩くと内裏、大極殿、朱雀門の基壇、宮内省建物や築地堀の一部などが復元され、又、朱雀門や朝集殿の復元模型が展示されているが、ある時、研究員に「発掘調査で建築部材が見つからないのに何故、建物全体構造が判るのか」質問したことがある。当時の建物は地面に穴を掘って小石を敷き、柱を立てる「掘立柱」か礎石の上に柱を置く「礎石建物」であり、礎石はもとよりその跡や柱穴（土の色や硬さの違いで判明する）、場所によっては柱の根元部分が千数百年たっても遺っている。又、屋根に樋（とい）がないため、雨垂跡（あまだれあと）が遺る。こうした痕跡から建物規模が特定されると、これに現存する古代建築物を重ね合わせて復元図を作成するとのこと。因みに唐招提寺の講堂は平城宮の朝集殿を移築・改造したものである。

こうして徐々に解明されつつある平城宮や現存する東大寺大仏殿などを思うとき、巨大なビルやダムを築き、本四連絡橋を架ける現代の技術には到底およばないが、当時の人々の建築技術、美意識は、我々の想像を遙に超えて素晴らしいものがある。

奈良の都は、平安以降その多くを田畑に変えて戦後に至っているため、多くの遺構・遺物が現在に遺されたもので、数十年踏み固められた役所街などを農地とするに多大の労力が費やされたことを思うと、先人の苦勞に感謝しなければならない。とともに、これまでの調査研究で培った我が国の発掘技術や遺構・遺物の保存修復技術を、今以上に世界の文化財保護に生かせたら、単に国際貢献に止まらず、日本の歴史の謎の解明に繋がるのではと期待しているところである。

想いのままに



人事主任

小山 政俊

〔V. S. O. P〕

朝6時、目覚し時計の音がする『さつき横になったと思ったら、もう朝か……』と思いつつ起床。

身支度を整え、朝食、洗面等を済ませ、玄関へと向かう。女房が弁当を持って玄関まで送ってくれる。これが、大体6時40分である。

車を運転すること1時間余、8時前後には呉高専の正門に到着する。守衛所で鍵を受け取り、庶務課の部屋へ、いざ出陣！

先ず、①出勤簿に押印。②やかんを火にかける。③机の上の雑巾掛け。④複写機の電源を入れる。⑤書庫等の開鍵。⑥テレビの電源を入れ、某国営放送（正確には特殊法人である）の朝の連続ドラマを見る。そして、8時30分、いよいよ臨戦体制に入る。

これが、4月以降の私の「V. S. O. P（べりい・すべしゃる・わん・ばたーん）」なのです。

アフターファイブはというと、4月から8月までは、残業の鬼と化し、早いときで21時、遅いときはシンデレラの魔法も解ける時間を過ぎ、それから広島まで41kmの深夜のドライブ。睡眠不足で、金曜の午後には、電算機やワープロの前で、コックリ、コックリなどという事もありましたが、夜遅いのは1月から続いているので、もう慣れっ子です。

ただ、辛かったのは、土曜、日曜日と祝日以外に、子供（2歳と6歳になる娘）と顔を合わせることが殆どなく、女房の顔も見ずに出勤する事さえも幾度かあり、深夜にそっと子供の寝顔を見て『よし、明日も頑張るぞ！』と、自分に言い聞かせながら床に着いていたことです。

9月に入ってからは、18時頃に帰れる日もあり、正規の3人体制に戻った10月以降は、なんとか人並みの生活(?)ができるようになった。

それは、帰宅したとき家に灯がついていて、娘2人

が笑顔で迎えてくれる。これほど嬉しいことはない。
この愛娘の笑顔こそ、私の元気の源である。

〔嫌いなもの?〕

さて、人並みの生活(?)ができるようにはなったが、やはり朝は辛い、寒いうえ真っ暗。しかし、遅刻する方がもっと嫌である。たとえ、1秒たりとも遅刻すると罪悪感を覚える。公務員は定時までに出勤し、出勤簿に押印するのが基本であり、これができなければ、公務員失格であると考えている。

仕事に限らず、時間に遅れるという行為は、相手に失礼だし、恥ずべき行為だと思う。私が待たされたときは、イライラもするし、何かあったのだろうかと心配もする。だから、人にはそんな思いはさせたくないのである。

時間にルーズな人は、好きになれない。

〔仕事も一所懸命〕

私は、広島大学から人事交流というかたちで呉高専に転任して来ました。『どうせ2〜3年で替わるんだから、』と思っている方もいらっしゃるでしょうが、このような人事異動は、大学においては当たり前の事で、4〜5年もあれば、総入れ替えに近い状況です。

私も、奉職して17年、5回の異動があり、様々な人と出会いました。「この仕事は嫌だ、早く異動したい。」と言って、ただ、ただ、異動があるのを指折り数えて待っていた人もいましたが、こんな考えをしては進歩はありません。

私は、何時も前向きに考えてきました。確かに辛い職場もありますが、前任者も、次に来る人も居るので。少しでも楽に、合理的にならないか(自分が居るうちでなく、将来的でもよいのです。)それが無理なら、せめて楽しく、気持ち良く仕事が出来ないだろうかと常に考え、努めて来たつもりです。

この職場においても、同じ心構えで臨んでいます。とにかく、マイナスにだけはならないよう頑張るつもりです。

〔遊びも一所懸命〕

「遊び」と言えば、お叱りを受けるかも知れませんが、この歳になって、野球をすることは夢にも思いませんでした。今まで、キャッチボール程度はしたことがあります。実際にゲームまですることになるとは……。

最初は、『本当に出来るだろうか』と

思っていたが、いざやってみると、珍プレーあり、好プレーありで結構面白いもので、野球を通して人との出会いもありました。とにかく、汗をかくというのは、健康的で素晴らしいことです。できれば、これからも続けていければと思っています。

しかし、人の集まりが芳しくなく、今年からは野球部がなくなるかも知れません。(出来なくなると残念です。)

〔最後に、自己紹介〕

☆出身地：岡山県(標高400mの山の中)

☆誕生日：1月4日(御用始め)

☆干支：亥

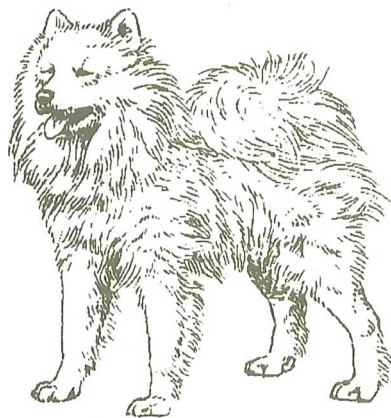
☆血液型：B型

☆尊敬する人：父母、アニーサリバン女史(ヘレンケラーの家庭教師)

☆性格：皆さんの判断にお任せします

☆趣味：魚釣り(調理まで)、キャンプ

以上、想いのまま筆を走らせたのですが、『何事も一所懸命』にやりたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



壁という名の試練



学生課

小林 隆暁

私がこの呉高专に桜の花咲く4月に赴任して以来、早いものですでに9ヶ月が過ぎました。

その私と期を同じく入学された1年生の皆さんは、授業の時、休憩時間の時等、私が見た感じではもう大分この学校という校風に慣れて、勉強やクラブ活動等に頑張っているなという印象を受けます。

それに比べると私は学生生活から社会人としての生活への転換に伴う戸惑いというものはあると思いますが、他の教職員の皆様に迷惑のかけつばなしで大変申し分なく思います。

しかし、こうして社会人1年目としての9ヶ月を振り返ってみると、私自身あまりプレッシャーというものを感ぜない性格なのですが知らず知らずの内にその圧力に潰されてしまっていた事実を改めて社会人としての世の中で働いていく事の難しさ、大変さを感じずにはられません。

やはり、生きていく上で何か一つの転換期に入った時や何かを取り組もうとする場合、何らかの壁がでてきます。

それは人それぞれによって異なりもするでしょうし、その大小も違うでしょう。

自分自身この9ヶ月、なんとか頑張ってやってこれたという事よりも、せっかくの壁という名の一つの試練を逃してしまった事に後悔せずにはられません。

ですが、実際に実行するというのはとても困難な事です。

ですから、その言葉に甘えるつもりはありませんが、あまりアレもコレもという気もありません。

これからも何か事ある度壁という名の試練はたくさん私の前に立ちふさがってくるでしょうが一つでも多く、ゆっくりではあるかもしれませんが、乗越していけるよう頑張っていく所存です。

最後に、月並みではありますが私の推薦する本を紹介して締めくくらせて頂きます。

Arthur-Bloch 著の「マーフィーの法則」です。

この本は、科学者や官僚やヒューマニスト、批評家の人達によって述べられた法則の書かれた本です。

普通の本と違ってこの本はそれらの多種多様な法則しか書いてありません。

しかし、読んでいて妙に「いわれてみれば確かにそうだ」というように納得のいってしまう法則の数の多さには驚きます。

その法則の中の一つに「対応方法を知らないエラーはテストしない事」とあるが、私が CONFIG, SYS という環境を設定するファイルの内容を変えようとして（本当にそういえるかどうかはあやしいが）間もない頃、よく理解していないのにいろいろと書き変えてしまい、いざ起動してみるとハングアップしてしまうという事を幾度となく繰り返していた時の自分をその法則を通して思い出さずにいられなかった。

法則に「はまってしまう」事は、滑稽であるかもしれないが意外に自分がそれに「はまっている」事実に気が付く。そしてそれに「はまらない」為にはどうすればよいか、皆さんもこの本を読んで、振り返ってみる事をお薦めします。



海外だより

レディング大学の本部図書館

一般科目 川尻 武信

「呉高专だより」34号でレディングでの生活をお知らせしました。今回は、レディング大学の図書館について述べることにします。この大学には、主要な図書館が3つあります。ここでは、その中のひとつである本部図書館を紹介します。

本部図書館は、キャンパスのほぼ中央に位置していて、近くに、学生会館、食堂、銀行などがあります。近代的な建物で5階建です。1階には、案内所、貸出・返却カウンター、カード目録（書名目録カードと著者名目録カード）、所蔵検索用のコンピュータなどがあり、有料のコピー機もあります。2階には、最近の専門雑誌と公文書が並べてあります。3階には、自然科学の本、4階には、人文科学の本、5階には、社会科学の本があります。蔵書数は、約75万冊です。

開館時間は次のようになっています。

授業期

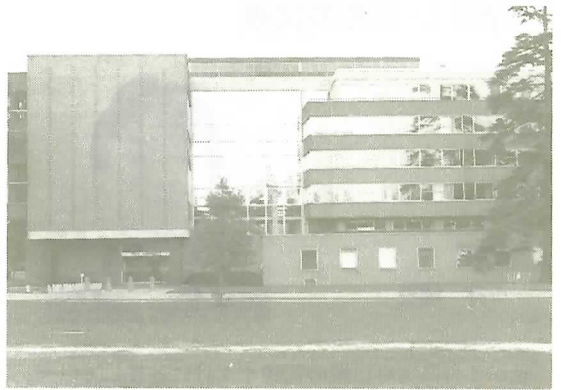
月曜日から木曜日	9:00~22:15
金曜日	9:00~19:00
土曜日	9:00~12:30
日曜日	14:00~18:00

休業期

月曜日から土曜日	9:00~17:00 (もしくは、18:00)
----------	-------------------------

御覧のように、開館時間が長く、平日は、午後10時15分まで図書館が利用できます。ただし、金曜日は、午後7時までしか利用できません。土曜日・日曜日でも半日開かれています。近くの学生会館や食堂は、平日、午後5時に閉ること、土曜日・日曜日は終日休みであることを考えると、この長い開館時間は、利用者にとって本当に有難いことです。

探している本を見付けるには、カード目録を利用できますが、コンピュータによる検索もできます。検索用のコンピュータは各階に設置されています。探しにくい場合、各階にある案内所に行けば、適切な助言をしてもらえます。探している本を他の人がすでに借りている場合、予約カードに必要事項を記入して1階の貸出・返却カウンターに提出します。図書館は、その本を借りている人に7日以内に返却する旨を書いた手



紙を出します。そうすることにより、遅くとも7日後までに予約した人の手に借りたい本が届くこととなります。しかし、多くの人が同一の本を借りたい場合は、予約した順に借りることになり、一週間以内に自分の読みたい本が手に入らないこともあります。

貸出期間は、学部生と一般利用者の場合2週間で、大学院生と教職員の場合6週間となっています。1週間しか借りれない本や1日しか借りれない本もあります。専門雑誌の貸出期間は、すべて1日です。1日しか借りれない本は、教官が推薦したもので、短期貸出コーナーに並べてあります。このコーナーにある本は、授業に不可欠なものが多く、よく利用されています。

1日しか借りれない本は、翌朝の10時までに返却しなければなりません。ただし、金曜日に借りた場合には、月曜日の朝10時までに返却すればよいことになっています。返却できないと罰金として20ペンス（1ポンド170円で計算すると34円）払わなければいけません。この規則は、なかなか厳格です。一つ具体例をあげます。私の友人が、午前10時少し前に返却する本を自分の寮に忘れたことに気付き、すぐに図書館に行き、寮にもどり10時30分ごろには返却することを係員に伝えました。しかし、10時までに返却できないので20ペンス払いなさいという返事が係員からあったそうです。返却が遅れるといつも罰金を払わなければならないのは1日しか借れない本の場合だけです。他の本の場合には、個人あてに督促状がきます。ちなみに、罰金は、図書館を充実する際の費用にあてられるとのことでした。

以上、本部図書館の一利用者が気付いたことをとりとめもなく述べてきました。相互サービスなどまだ紹介したいことはありますが、紙幅がつかまりましたのでここで筆を置きます。

私の推薦する本

「志ん生文庫」

(立風書房)

一般科目 有廣 圭司

古今亭志ん生(本名美濃部孝蔵)。¹73年(昭48)9月21日に没した。享年84歳、丁度、昨年が没後20年であり、故人をしのんで、CD、カセット等が出されたが、特筆すべきものはアニメ落語(3巻)である。残っている映像がほとんどないため、声はレコード等の音を用い、姿をアニメでという企画である。是非、入手したいものである。私はレコード、カセットに加え、¹55年(昭30)5月、NHKホールでの演題「風呂敷」を録画し、持っている。これが高座での映像の唯一のものであるといわれている。1980年(明23)6月生まれ。明治42年頃、二代目三遊亭小円朝門下、朝太を名乗る。大正5年頃、円菊で二ツ目、10年、金原亭馬生で真打、その後も改名をくりかえしながら、昭和14年、三代目古今亭志ん生を襲名するに至る。16回改名をしたといわれている。名をかえると借金取りから逃げられるとか、ゲン直しのためとかが改名の動機であったらしいが、改名には披露のため金がかかったらしい。何のための改名かと私には思えるが、志ん生には真剣であったようだ。長男は馬生(早く没)、次男は志ん朝で、志ん生襲名が期待されている。さて志ん生の魅力は何であろうか。高座は二、三度、聴いたが、何ともいえない話術の魔力は、私の大好きな「寅さん」映画にも、山田監督、渥美清などスタッフの中にも生きている事を強く感じる。飲み、打つ、買うという三拍子そろった道楽、それも徹底した生きざまの中で得られたものが、彼の芸の肥しになり、人を引き込むのであろうか。なめくじ長屋でのすさまじい貧乏生活、戦中、酒が飲めると軍の慰問に満州(中国東北省)に家族をほぼり出して出かける無放図さ、帰国した時「…ヒ、カエル、サケタノム」という電報を打とうとした話など多くのエピソードを残している。その生活は結城昌治「志ん生一代」にくわしい。没後20周年記念出版として「志ん生文庫」6巻(立風書房)が出され、志ん生の高座振りをうかがう事ができる。「替り目」

の枕は、上戸の分類である。

「おととととと……あ、ケッコウ」ニワトリみてえなのがある。えー、壁塗り上戸なんてのがありまして、「もういいよ、もういいよ、……」(と手で壁を塗るまくる仕草) そうかと思うと、仏上戸なんて、「おっ、おうおうおう、も、勘弁してくれ、もう……」(と合掌する)と拜んでいるのがあります。「本題」、「落ち」と続きますが、「饅頭こわい」では、「うわーっ、こんどは、お茶がこわいー」が、落ちです。当時、文楽、円生など名人がいましたが、どこか隙があり、気取らず、えらぶらず、裸の人間そのまま、日常生活に裏付けられた噺をしたと思う。特に、長屋物で、夫婦、親子、住人関係の描写等を「嬬」を通じ目前にあるように浮かび上がらせてくれる。悪口を言いながら、女房には頭が上がらず、亭主をうまく操る山の神、結局おっかあにいじめられる志ん生の夫婦の対話の描写ほど身につまされるものはない。大酒呑みだけど子ほんのう、その他、多くの矛盾を抱えた人生で、人生を洒落のタネにし、生きた志ん生は幸せな人であったと思う。



「おはなし科学・技術シリーズ」

(日本規格協会)

機械工学科 中迫 正一

呉高専に入学して4年生ともなれば、約8割近くが専門科目となります。数学・英語・国語などのような中学生の時から勉強してきた教科と違って、始めて勉強する訳ですから、学生の皆さんは少しとつきにくいのではないのでしょうか？ もちろん皆さんは、機械・電気・土木・建築と専門の違いこそあれ、実践的な技術者となる為に勉強している訳で、その専門科目の授業では、ほとんど専門書が使われています。

さて、自分が今勉強している専門書を手にとって見て下さい。本によって多少の違いがあるかも知れませんが、かなり難しいように感じることでしょう。中には2、3ページ読んだだけで、最高の眠り薬となる人もいるのではないのでしょうか？

ではどうして難しく感じるのでしょうか？ 中には本当に高度な専門書もあるでしょうが、大半は難しく思うに思っているだけではないですか？

日本規格協会から出版されている本に「おはなし科学技術シリーズ」というのがあります。例えば、

単位のおはなし

熱処理のおはなし

力学のおはなし

化学計測のおはなし

：

本の題名を聞いた感じはどうか？ 本屋に行って「計測工学」なんていう本を見ると難しそうなお本だと感じるかも知れませんが、「化学計測のおはなし」という題名を聞いただけで少しは簡単そうに思えるのでは？ 本の中身を読んでみると今まで専門書の中では見たこともないようなマンガが書いてあったり、文章も易しく書いてあるので、それほど難しく感じませんし、専門書を読んでもよく理解できなかったことが、なるほどそういうことだったのかと理解できることも少なくないでしょう。

もちろん最終的には専門書を勉強する必要があるとは思いますが、学生の皆さんが専門教科を勉強する本としては、絶好の入門書ではないかと思えます。特に専門教科はどうも苦手だと感じている学生の方は、一度本屋で手にとって見て下さい。

「街道をゆく」

(司馬 遼太郎著)

電気工学科 脇本 隆之

問 次の四角の中に適切な語を入れなさい。[七〇八〇]。この問いに対して私たちは、十中八九の人が「七転八起」と答えるのではないだろうか。また、次の『「一太郎」とはどんな人ですか？』という問いに対して、「一太郎ってワープロの事だぜ、ばかだなあ」と十人中九人、いや十人ともがそう思うに違いないのではないだろうか。広島に住んでいる工業系の学生にとっては、尼子十勇士山中鹿之介の「七難八苦」や、昔の教科書には出ていた親孝行息子「一太郎」の事など知る由もないのではないだろうか。私にとっても、安芸吉田の毛利氏や浅野氏は小学校で習っており、身近な存在であったが、隣国の尼子氏は敵であったためその存在さえ習わなかったのであろう。ましてや尼子十勇士など頭の片隅にも存在するわけがなかった。またサンフレッチェの由来で有名となったあの三本の矢の教えにしても、それを語ったとされた時は、実際には臨終の際であったのだが、私は学校では「ある時」としか習わなかった。さらには松江をこよなく愛したと伝えられる小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)であるが、その作品も習っていたし、松江の八雲邸にも中学生の時行った事があった私だったが、八雲と怪談と松江の三者が結び付いたのはそれよりずっと後の事であった。

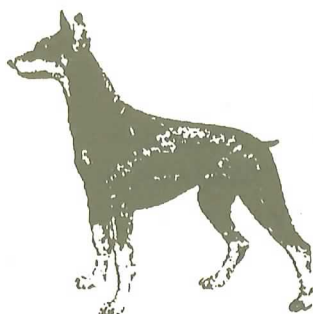
これらの問いが解けたのは、すべて読書のおかげであった。それも第三者によって書かれた郷土史ものを読み始めたからである。郷土をこよなく愛する人の書は思い入れが強く、それゆえ小気味良さを覚えるが、我々に時として偏った知識を植え付ける事がある。若いうちは視野も狭く、自分の周りしか見えないために郷土意識もかなり大きいものとなる。私も例外ではなかった。広島の人が書いた広島の本を好んで読んでいた。そのため広島市の事はよく知っていたが、一步広島市を出ると何も知らない状況に陥っていたのであった。

本書は、著者司馬遼太郎が自ら全国各地の街道を実際に歩き、見聞きした事を紀行文としてまとめた書である。特に第21巻は安芸吉田から三次にかけての国道54号線添いの紀行であり、その付近に住する学生にとつ

ては一読の価値があるのではなからうか。

著者は旅行者としての目でその地方の人となりを見て、研究者としての目でその地名の由来を考察する。郷土人による書でないだけにその目は厳しく冷静である。例えば地元の官の冷たさとその歴史的背景をあげることは第三者ゆえに可能であったといえよう。また「三次」という地名が付けられ、それを「ミヨシ」と読むに至った由来を、三次の人はおそらく小学校で習っているであろうが、自身の記憶と比較して見て欲しい。ここで筆者は我々のよく知るところの「古事記」「日本書紀」等を引合いに出し、考察・類推を行なっている。我々が基礎的に学習する内容がこんなところで引用されるとは基礎学問の重要性がどれだけ大切であるかを思い知らされる。また筆者が考察・類推する過程は実験レポートの考察に日々悩む学生にとっても大いに参考にならうかと思う。

元来より理系・文系は明確にその性格が分類されているが、こと事物の探究姿勢に関しては理系文系の区別は無い筈である。本校学生のように理系の頭で凝り固まっている人には本書のような、特に身近に関連するような内容の書を紐解くことによって実験・研究の本質が見え、取り組み方も自ずと開けてくるのではないかと思う。



新着図書30選

〈人文・社会〉

◆愛新覚羅 溥儀著

「わが半生」 (筑摩書房)

映画ラストエンペラーでご存じの、清朝最後の皇帝の波瀾に満ちた生涯の自著です。

辛亥革命から満州事変、日本関東軍傀儡国(満州国)や二次世界対戦の嵐の中で、時代の波に翻弄された人生を淡々と語っている。

関東軍に政略結婚を強いられた日本人女性愛新覚羅浩の生涯についての、渡辺みどり著「愛新覚羅浩の生涯」(読売新聞社)や、浩自著「流転の王妃の昭和史」(新潮社)なども合わせて読むと歴史の裏がわかる。

(図書係)

◆川口 慧海著、高山 龍二校訂

「チベット旅行記」全5巻 (講談社)

かつて、ヒマラヤを越え仏教の原典を求めたいという求道心から、厳重な鎖国をしくチベットに、あらゆる困難にうちかって単身入国を果たした川口慧海師の旅記。

(解説より)

〈自然〉

◆高田 高夫〔ほか〕執筆

「現代応用数学の基礎 微積分 別冊・数学セミナー」(日本評論社)

微積分は純粋数学としての理論的な面と応用としての計算技術的な面とを併せもっています。しかし高専の数学における微積分ではその両面を同時に学ぶことは困難で、計算面にその重みが置かれてきました。皆さんの学習した微積分を幅広い応用数学の基礎とするには、残された理論的な面の補強が必要です。その一参考書として本書を推薦します。

(今井記)

◆福井 謙一監修

「サイエンス NOW」全12巻 (平凡社)

人間をとりまく環境は、いまでは、自然のほか、科学と技術によって大きく左右されるようになりました。その意味では、科学が嫌だとか技術がわからないといつてすませる時代ではないのです。

そこで、環境、資源、物質、コンピュータ、エネルギー、未来技術などについての現代科学・技術の最新の成果を、わかりやすい写真、図版、説明によって解説している。 (監修のことばより)

◆マーティン・ガードナー著、坪井 忠二〔ほか〕訳

「新版 自然界における左と右」(紀伊國屋書店)

鏡の世界から宇宙の果てまで、「左と右」の不思議な冒険の旅。「人を夢中にさせ、啓発し、わかりやすく、機知縦横で、創意に充ちている。科学読物の最高傑作」 (American Mathematical Monthly 書評)

〈共通〉

◆日刊工業新聞社編

「モノづくり解体新書」全4巻 (日刊工業新聞社)

「これはどうやって作るのだろうか……？」

誰もが一度は疑問に感じたと思う、身の回りの品物(日用品、工業用品、ハイテク製品など)の作り方。本書はこうした素朴な疑問に対して、やさしいイラストによって解説している。

モノの歴史やコラムにより意外と知らないモノの素顔や技術にふれることができる最適書です。

(まえがきより)

◆小林 光夫〔ほか〕著

「UNIX ワークステーション入門」(東京大学出版会)

UNIXにはBSD系とSystem V系がある。

本書は高専、大学などにおける初歩の情報処理教育のための教科書、参考書、手引書として利用することを目的とし、BSD系UNIXを主に記述している。

ワークステーションの前に座ってエディタ、処理、ファイル管理、プログラミング、コンピュータネットワークの実際を理解できる基本書です。

(まえがきより)

〈機械〉

◆谷下 市松著

「工業熱力学 基礎編」(裳華房)

約40年前に日本機械学会から発行された、谷下著「熱力学」がこの本のルーツである。その後、時代の進展に合わせて内容の刷新、充実、諸量のSI化などが行われ、現在の「工業熱力学」基礎編および応用編になった。機械技術者が扱う熱力学の問題はすべて取上げてあり、座右の書として参照することを薦めたい。

(鍋本記)

◆白石 修二、小林 錦子著

「C言語演習」

C言語の初心者を対象として、基礎的な事項を中心にわかりやすく説明した実力アップのための演習書です。例題とそのサンプルプログラム、さらにその実行例も示しています。また、文法的な事項についても、文字、配列、文字列、ポインタ、関数、構造体等について要点をわかりやすく述べています。(野原記)

◆田中 久一郎著

「摩擦のおはなし」(日本規格協会)

はるか昔、人類は摩擦を利用して火を起こしました。自動車や電車が走るのも、すべて摩擦が存在しているから出来ることです。このように摩擦は、身近のところで私たちの生活と密接に関係しています。

本書は、摩擦って何だろう？という疑問を解決してくれる入門書です。(中迫記)

◆砂川 重信著

「力学の考え方」(岩波書店)

物理とは、本来、丸暗記するものではなく、自分で考え、理解することが大事な学問ですが、最近の学生にとっては、この“理解する”ことが苦手な様です。本書は、通常の教科書では天下りの的に与えられている法則についても、誰にでも納得できるように詳しく解説してあります。この本を読んで、自分で考えることによって、物理のものの考え方を身につけることができるでしょう。(深澤記)

◆B. W. Char〔ほか〕著

サイバネットシステム(株) 訳
「はじめての Maple V」

(シュブリンガー・フェアラク東京)

Maple (メイプル) とは、記号計算や数値計算をしたり、グラフを図示したりするためのソフトであり、現在、広く世界中の科学者、エンジニア、教育者等に日常的に使われています。本書はメイプルの使い方を説明した入門書であり、数多くの例を上げてあるのでわかりやすいと思います。(深澤記)

〈電 気〉

◆川上彰二郎〔ほか〕著

「光波電波工学」 (コロナ社)

電気通信では高い周波数の搬送波(信号を運ぶ波動)を用いることで、その運び得る信号の量—情報量が増加する。そのために、最近光が利用されている。この光を用いた通信の原理は、電波を用いた通信とほとんど同じで、共に重要なのは平面波の理解である。この平面波の観点から、通信の原理を学ぶのによい本である。(山崎記)

◆小川 吉彦、北島 秀夫著

「新版 電子工学概論」 (朝倉書店)

電子工学の発展は急速であり、この分野については最も新しい本を読む事をすすめる。この本は92年刊で、その内容は半導体の基礎から応用、例えばアナログ回路、デジタル回路、コンピュータ、オプトエレクトロニクス、そして半導体センサまで書かれている。教科書またはその副読本として利用すればたいへん役に立つと思う。(山崎記)



◆奥澤 隆志編著

「電子・情報基礎シリーズ4 電磁気学」
(近代科学社)

電磁気学の教科書です。クーロンの法則などの経験則から始まって最後にマクスウェルの方程式に達する形式で書かれている。電磁気学は基礎科目であるが、その学習は容易ではなく、具体的な問題に適用するのもたいへん難しい。その対策はくり返し学習することです。教科書とは異なる別の本で学ぶのは一つの方法です。(山崎記)

◆岩井 壮介〔ほか〕著

「知識システム工学」 (計測自動制御学会)

システム工学の観点から、知識情報処理に必要な定性的モデルの構成法、問題解決のための対策法、知識獲得法やシステムのエキスパートシステムの構成法を論じている。制御・システム工学の研究者や技術者が、知識処理技術を基礎から応用まで学ぶことができる好書である。(小林記)

◆平山 宏之〔ほか〕著

「雑音処理」 (計測自動制御学会)

本書は計測における共通技術としての雑音処理について系統的に述べた解説書である。計測における雑音は、信号に加わってその質を劣化させるような変動成分すべてを含む広い概念であることを理解したうえで、計測システムの内部で発生する雑音や外部から混入する雑音に対してどのような対策を立てればよいか具体的に述べている。(小林記)

◆森村 正直〔ほか〕著

「先端センシング技術」 (計測自動制御学会)

日進月歩の発展を見せているセンシング技術に計測工学としての視座をすえてその体系化を図るべく、知能化、高感度化、多次元化などの先端技術、センサの高性能化、高機能化に欠かせない超小型デバイス、新材料や高信頼技術の開発状況、さらに今後の発展が期待されるあいまの量のセンシング技術について横断的にまとめたものである。(小林記)

◆ SICE 産業委員会編

「デジタルシステム耐ノイズ計測ガイド」

(計測自動制御学会)

本書はデジタルシステムの耐電磁気設計について多面的に検討し、その成果をガイドラインとしてまとめたものである。近年、マイクロプロセッサの性能が著しく向上し、広い範囲で、かつ多様な使われ方が行われるようになった。その一方、素子の作動周波数の上昇、高密度実装化、移動機器の増加など、耐ノイズ環境が悪化し、ノイズ問題がクローズアップされるようになってきた。(小林記)

〈土 木〉

◆細川 護熙、中村 良夫〔ほか〕著

「景観づくりを考える」 (技報堂出版)

内閣総理大臣細川護熙氏のはじめ学、官界各方面の第1人者7名が、景観設計のヒント、手法を行政的観点も含め幅広くまとめられた書である。

土木構造物の設計にあたっては、以前は「安全」、「経済性」の条件を満たせばよし、とされた。しかし近年「シビックデザイン」のセンスを必要とされるようになった。「景観設計」の勉強をする者にとって有用な書である。(石井記)

◆NHK テクノパワー・プロジェクト著

「巨大建設の世界Ⅰ 水圧と闘うダム・運河」

(日本放送出版協会)

NHK スペシャル「テクノパワー～巨大建設の世界」シリーズ第1回目で、平成5年8月に放映されたものである。利水や治水をテーマに、ダムや運河をつくる技術の発展と、それらがもたらした功罪について考える。最先端技術を結集して建設を進めている宮ヶ瀬ダム(神奈川県)や、ドイツを中心に広がっている近自然工法などを紹介している。(阿部記)

◆英国土木学会編 土木学会誌

「フォース橋の100年」 (土木学会)

フォース橋100周年記念事業の一環としての一般人対象講演を出版物とした本の日本語訳です。本橋はイギリスで1890年に完成しました。長さ約1630mのトラス鋼鉄道橋です。鋼材を約51000t使っています。1983年に完成した因島大橋は長さ1270m、鋼材は約29000tです。土木だけでなく、建築、機械の皆さんが読んでも工学的知見に得るものがあると思います。

(丸上記)

〈建 築〉

◆八木 幸二著

「世界のおもしろ住宅」 (松下電器)

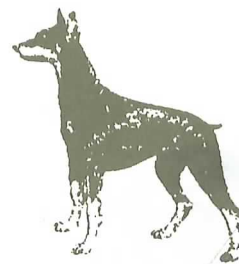
住宅は我々の生活で最も身近な建築である。本書は世界「アフリカ～中南米～ヨーロッパ～中東～アジア」の様々なおもしろ住宅を紹介した写真集である。住宅と共に世界の生活・文化もかいま見ることができ楽しい。(篠部記)

◆可児 長英著

「マンガで学ぶ建物の配筋」 (井上書院)

鉄筋コンクリートは文字どおり「鉄筋」と「コンクリート」からできているのだが、内部の「鉄筋」については外部のコンクリートに包まれているため、どの様になっているのか外見からはわからない。本書は建物の配筋についてマンガでわかりやすく説明している。

(篠部記)



図書館からのお知らせ

♡♡♡ 図書館サービス ♡♡♡

【レファレンス・サービス】

◆ 学習、研究を進めていく利用者のために、図書や資料調査の相談、質問に応じて、援助することをレファレンスといいます。図書館の中心的なサービスのひとつで、主な内容は、次のようなものがあります。

- (1) 図書館の利用案内
- (2) 図書館資料の所在案内
- (3) 用語、人名、地名、事柄などの事項調査
- (4) 特定のテーマに関する調査または資料の紹介
- (5) 情報検索

◎ どんなに些細なことでも気軽に係員におたずねください。カウンターに、「文献調査・質問票」も備付けてあります。

【文献複写サービス】

◆ 著作権法に基づいて、学習・研究のために、図書館の所蔵する資料を複写することができます。

			学内者	学外者
複写料金表	1枚	私費	20円	35円
	(B4以下)	校費	15円	

【相互利用サービス】

◆ 学習・研究のために必要な資料を本校で所蔵していない場合に、図書館を通じて他の大学等の図書館を利用できます。

- (1) 文献複写依頼……………文献を複写によって取りよせます。
- (2) 相互貸借……………図書の借用ができます。(なお、往復書留郵送料は自己負担です。)
- (3) 他大学図書館等利用……他の大学図書館に出かけて利用したい場合、「資料の閲覧願い」を発行します。
- (4) レファレンス……………所蔵・参考調査などの問い合わせをします。

なお、公共図書館は、直接出向いてご利用ください。

【オンライン情報検索サービス】

◆ オンライン情報検索サービスを利用できます。 (教職員・国費に限る。)

- (1) 文部省学術情報センター
- (2) 日本科学技術情報センター

「情報検索サービス利用申込書」に記入のうえ、申込みをしてください。詳細については、図書館にお尋ねください。

【あまり知られていないのでは？ 図書館利用法】

- ◆ 全国のいろいろな図書館から図書が借りられること。
(郵送料を負担すれば、約1か月間も借りられます。)
もちろん、コピーやレファレンスサービスの依頼もできます。
- ◆ 文献調査のためのレファレンスサービスの利用
疑問や情報の入手に困ったときは、遠慮なく図書館員に尋ねましょう。
- ◆ 意外と多くの図書を所蔵していること。
本校で所蔵する図書を毎日1冊のペースで読んだとしても、全て読み終えるには、200年もかかること。
この貴重な知的財産が意外と利用されていない。

【図書館への要望】

- ◆ 希望図書の購入
図書館へ備付けを希望する図書がありましたら、カウンターの「購入希望図書」申込書に必要事項を記入し、申込みください。購入について図書委員会で検討し、後日図書館の掲示板でお知らせします。
- ◆ 図書館利用上の要望
図書館への建設的な要望がありましたら、投書箱へ投書するか、係員に申し出てください。改善のための参考とさせていただきます。

【視聴覚設備（LD、CD再生装置）の利用の計画案内】あくまで予定

- ◆ 同窓会から、名作映画などのLD（レーザーディスク）ソフトの寄贈（43タイトル）がありました。これらのLDが図書館で視聴できるように、LD再生装置の導入を計画しています。
実施時期は、できれば平成6年4月中を予定しています。
実施が決まりましたら、あらためて詳細をお知らせします。

編 集 後 記

1月～2月にかけては、学生の図書館利用も多いようであるが、残念ながら読書よりも学年末試験に備えての試験勉強の場所として利用されているようである。

試験勉強の合間に気分転換という感覚でも良いから、パラパラと本をめくり、春休みの読書に備えたい。

現在、図書だよりは読書感想文を中心とする編集内容になっているが、今後は図書に関連する情報を図書だよりによく取り入れていきたいと考えている。編集についての皆さんのご意見をぜひお聞かせ下さい。

(図書館長補 篠部 裕)